

# 愛されてアブノーマル

*Natsu & Kyosuke*

---

柳月ほたる

*Hotaru Ryugetsu*



エタニティ文庫

## 目次

愛されてアブノーマル

5

書き下ろし番外編

受難の巻き込まれ××プレイ

341

愛されてアブノーマル

## 第一章 ヒーローも犯罪者

## 1

月末の金曜日、夜十一時半。

結城奈津は自宅マンションの三軒隣にあるコンビニの袋をぶら下げて、必要以上にゆつくりと歩いていた。こんなことをしても彼に会える確率は非常に低い、挑戦しいよりは遙かにましだ。都心に近い住宅街のため、空を見上げても星はあまり見えない。はあっと白い息を吐き出して、できれば運よく会えますようにと、心の中で満月に祈る。

「うう、寒い……。この季節は無理かも」

真冬の冷え切った空気の中をのろろと移動するなんて、自ら凍えさせて下さいと言っているようなものである。

奈津は小柄な体をさらに小さくし、緩んでいたチエックのマフラーをぐるぐると巻き直す。肩まで伸びたダークブラウンの髪も一緒に巻き込み、少し考えて髪はマフラーか

ら出すことにした。なぜならこの髪色は、彼が似合うと褒めてくれたものだから。

先月奈津は、二十七歳にして初めて髪を染めた。いつまでも終わらない片想いに悩む中で心機一転したかったというのもあるし、大人しくて地味な自分が少しでも明るい印象になればいいと思ったというのものもある。髪の色を変えた程度ではなにも起こらないとわかっていつつドキドキしながら出社すると、なんといち早く気付いた彼がボンと肩を叩いて「その色も似合うな」と声を掛けてくれた。

あまりの出来事に舞い上がってしまい、上擦った声で「は、はい……！」としか答えられなかった。そのことには後から少し落ち込んだが、奈津は一生この髪色で過ごそうと決めた。

この髪が彼を引き寄せてくれないか……という願いが本当に届いたのだろうか。マンションのエントランスに入る直前で、柔らかなウールのダッフルコートに包まれた奈津の肩が大きな手に叩かれた。

「結城、お疲れ」

その手が触れた部分から電流が走るように全身の毛が逆立つ。

あまりの奇跡に奈津はその場でガッツポーズをして叫びだしてしまいそうになる。しかしなんとかその興奮を表に出さないように取り繕い、貼り付けたような笑顔で振り向いた。

「課長！ お疲れ様です。今お帰りですか？」

「おう。金曜だからな、また接待だよ」

いつもは一分の隙もなく固められている前髪が、一房だけはらりと零れ落ちる。それをうつつとしそうに掻き上げながらエントランスの鍵を開けるのは、奈津が所属する総合商社の営業二課の真山恭介課長。営業事務として働く奈津の直属の上司である。

他人に厳しく、自分にはさらに厳しく、を信条にでもしているかのようにストイックなこの上司についていくのはとても大変だ。だが厳しい一方で非常に面倒見もよいため慕っている部下も多い。加えて真山の優秀さは目に見える数字としても表れていて、最年少課長ながら実績も高いと評判だ。

そんな真山のもとに配属されて二年、奈津はいつ実るともしれない片想いに身を焦がしていた。

「飲み過ぎには気をつけて下さいね。課長が倒れたらみんな困りますから」

「おい、俺はまだ三十四だからな。年寄り扱いするんじゃない。それより結城は夜中にコンビニか？ 危ないからこんな時間にあまり出歩くんじゃないぞ」

「すみません。気をつけます」

あなたに会えるかと思つてフラフラ出歩いてたんです、なんて言える訳がない。

週末は大抵、飲み会で真山は遅くなる。もしかしたらその帰宅とかち合うかもしれない

いと、金曜日の夜は近所のコンビニで必要のない物を買う癖がついてしまっていた。

二人は並んで歩き、エントランスの脇にあるポストの前に着く。そして奈津は、ポストの中を確認して必要な郵便物を選び分けている真山のために、エレベーターのボタンを押して待つ。奈津が買物に行っている間には誰も利用しなかったのか、エレベーターは一階に止まったままだった。

「悪いな」

「いえ。最近ポストイングチラシが多いですね。毎日日本当にゴミが多くて」

真山がエレベーターに乗り込んだのを確認した奈津はエントランスに備え付けのゴミ箱に溜まったチラシやダイレクトメール類を見て、大げさに顔を顰めてみる。こんな他愛もない会話も会社ではライバルが多くてなかなかできない。だからこうやってマンションで会った時が唯一にして最大のチャンスなのだ。

奈津が真山に初めて会ったのは二年前の春だった。定年退職した前任の課長の代わりに新しく来たのが彼である。イケメンですごく若いがり手らしい、とまことしやかに噂される中、オーダーメイドのスーツをピシリと着こなした彼が現れた瞬間に奈津は目を奪われた。端正な顔立ちも、程よく鍛えられた体も、堂々として無駄のない身のこなしも、奈津の心を鷲掴みにして離さない。

最初はどんな人が上司になるのかと探るような雰囲気だった課内も、真山が着任の挨拶を終える頃にはすっかり彼のカリスマ性に引き込まれていた。

『ねえ、真山課長って彼女いるのかな?』

『直接聞いてみよっか!? でもあの顔とスベックなら絶対いるよねえ』

真山が着任した日、女子社員達は彼の話題で持ちきりだった。かつこいいと浮かれるだけの者もいれば、早速誘ってみるつもりだと豪語する猛者もいて、奈津はあまりのライバルの多さに愕然とした。地味な奈津には、並み居るライバルを押し退けて真山の歓心を買うことなんて到底できそうになかったから。

でも……こっそり好きでいるくらいなら、いいよね。

そう思った奈津は、それから密かに真山を想い続けている。最初は一目惚れだった奈津が、真山の人間性にも尊敬と憧れの眼差しを向けるようになるまでに、そう時間はかからなかった。

彼は仕事では決して妥協を許さず、己に対してとても高い目標を設定している。さらに部下への指導も怠らない。その厳しくも的確な指導は、真山が部下の一人一人をしつかりと見ているからできることだ。もちろんその後のフォロワーや、日頃からのコミュニケーションも完璧だ。四年目の営業事務として一人前だと自負していた奈津も、真山の的を射た指摘によって自分の未熟な部分に気付けた。

ああ、ほんとにかっこいい……。奈津はいつも部下に囲まれている真山を遠くから眺め、うつとりとため息をついていた。

絶対叶うことのない片想いは少し切ないけれど、会社に行けば毎日会える。それに面倒見がよくて誰にでも優しい真山は、あまり目立たない奈津にもたまには声を掛けてくれる。それだけで奈津は幸せだった。それなのに、まさか彼が同じマンシオンに引越してくるなんて……

体に重力を感じ、エレベーターが静かに停止する。大して高層ではないこのマンシオンにおいて、エレベーターに乗っている時間は非常に短い。

結局今日は、ピザ屋のチラシがよく入っていること、それを見ると夜中なのにピザを食べたくなってしまう困ること、真山は学生時代にトッピング全部のせを頼んだことがあること、ここまで話したところで時間切れになってしまった。だが貴重な学生時代の思い出を聞けたのは大きな収穫で、奈津は非常に満足した気分エレベーターを降りる。「じゃあ、おやすみ。ちゃんと戸締まりして寝るんだぞ」

「そこまでうっかりしてませんよ! ……おやすみなさい」

ぺこりと頭を下げると、軽く右手を上げた真山がドアの向こうに消えていく。奈津も隣接する自宅に入り、こっそり真山の部屋のほうの壁に耳をつけてみる……。が、いつ

も通りなにも聞こえなかった。防音がしっかりしていることが、このマンションの売りなのだ。

「こんなに近くにいるのに、遠いなあ」

彼がこのマンションに引越して来たのはちょうど半年前のこと。休日に共用部分の廊下からかすかな物音が聞こえたので覗いてみたところ、なんとそこにいたのは引越し業者とそれに指示を出す真山だった。

その時の奈津の驚きと言ったらなかった。ここは奈津が社会人になった時からずっと住み続けているマンションで、会社へのアクセスが非常にいい。だがまさか隣に同じ会社の人間、それも真山が引越してくるとは思いもよらなかったのだ。

そういえば、忘年会で彼は通勤時間を短くしたいとぼやいていた。それに隣の住人が大音量で音楽を聴くから静かな環境に引越したいとも。その時は周りを囲んだ女子社員達がしきりに自分の住む地域をすすめていて、大人しい奈津は会話に入ることすらできなかつたのに。

降って湧いたような幸運に奈津は心の底から感謝した。この環境を生かしてなんとか真山とお近付きになり、できれば恋人と呼べるような関係になりたい、そう思った。

だがいきなり馴れ馴れしく押しかける勇氣はない。おかずを作りすぎました、と言って持つて行くのもなんだかあざとい気がする。結局奈津にできることといったら、偶然

会えるのを期待して、コンビニに行くという口実のもと夜中にマンションの周りを徘徊するくらいだ。

真つ暗な室内で壁を伝い、電灯のスイッチを押すと、シンプルな1DKの部屋が浮かび上がった。そして背の低いチェストの上にのせた、暖色系のルームランプもつける。可愛いレースの縁取りがされた笠の部分に淡く暖かな光がぼうつと灯る。その光を見ているうちに奈津は自然に頬が緩んでしまう。

「ふふ。課長、今日もかつこよかった」

このルームランプは、なんと真山から譲り受けたものである。

あれは彼が引越してきてすぐの頃のことだった。夜中にどうしても炭酸飲料が飲みたくなってコンビニに行ったところ、結婚式の二次会帰りだという真山とエントランスで出くわした。

電器店の大きな紙袋を持っていたから、もしかして賞品が当たったんですかと話を振ると、『ビンゴで当たったんだが明らかに女物なんだよ。あ、ちょうどいいから結城使うか?』と紙袋を押し付けられた。

彼に会えただけでなく、まさかこんなプレゼントまでもらえるなんて！ 奈津にとつては、真山からもらえるものならガム一枚だって死ぬほど嬉しい。もしも実際にもらっ

たら、もったいなくて食べられず、ずっと大事に取っておいてしまっただろうなと思うくらいには。

嬉しさのあまりはしゃぎ出したのをこらえ、エントランスの床に一旦袋を置いて開けると、そこから出てきたのは高さ三十センチほどのファンシーなルームランプだった。確かに三十代男性が使うには少々可愛らしすぎる。

『ほ、ほんとにいいんですか!? 嬉しいです! 一生大事にしますっ!』

『そうか。そんなに大事にしてもらえるなら、このランプも喜ぶな』

箱を抱えて大喜びした奈津に、真山は少し驚きながら苦笑していた。それ以来、このルームランプは奈津の一番の宝物だ。

コートをクローゼットに片付け、そろそろ寝るためにバジャマに着替えようかと思っただ時だった。ピンポン、とエントランスのインターフォンが鳴る。

「え、こんな時間に?」

壁の時計を見れば、もう少して日付が変わるところ。深夜に訪ねて来る人間に心当たりはなかったが、奈津はインターフォンの受話器を手を取った。

『ヤマネコ運送です! お届け物です』

受話器越しに明るい声が聞こえてきた。このマンションには宅配ボックスがないので、

仕事をしている奈津は昼間は荷物を受け取ることができない。だからいつも平日は夜間に時間指定して荷物を受け取るのだが、さすがに遅すぎる。

「あの、こんな時間に宅配ですか? 送り主は?」

『すみません、不在票を入れたの、見て頂けませんでしたか? 連絡がないし、日中もご不在なんで今持ってきたんですが。えー、送り主はA&G出版で、品名は懸賞当選品になってますね』

「懸賞当選……? わかりました、とりあえずドアを開けますね」

最近、懸賞に応募しただろうか、と奈津は首をかしげた。

A&G出版は若い女性向けの雑誌を多く出している出版社で、会社の休憩室にも一冊置いてある。何度か買ってアンケートハガキを出したことはあるものの、最近はずいぶん忙しい。何度か買っていなかった。だが、もしかしたらかなり前の懸賞が当選したのかもしれない、と納得し、オートロックの鍵を解除する。

そしてしばらくすると、今度は玄関のインターフォンが鳴らされた。

「はい、今開けます」

ドアスコップを覗くと、ヤマネコ運送カラーのオレンジの帽子を目深にかぶった男性が大きな箱を抱えて立っている。不審者ではないようだ。

「すみません、不在票に気が付かなくて」



ドアを開けた奈津がそう言うと、ヤマネコ運送の配達員は小さく笑った。その笑い方に、ふと背筋が寒くなる。なんだか気持ち悪さを感じつつも、すぐさま荷物を受け取ってしまい早く帰ってもらえばいいのだと気を取り直す。

「いえいえ、そういう人多いんですよ。あの、これ重いんで、中に運ばせてもらってもいいですか？ サインは後で結構なんで」

「じゃあ、お願いします」

ドアを大きく開けると、狭い玄関に配達員が足を踏み入れる。一旦奈津が室内に下がろうとしたところで、隣の家の玄関が開く音がした。

「課長？」

スーツを脱いでラフな格好をした真山と、配達員越しに目があった。

「結城？ こんな時間に荷物か？」

「あ、はい。私がつかりして不在票を見落としてみたいなんです。昼間はいないからって持ってきて下さったそうで」

奈津が自分のミスに苦笑いすると、いつも穏やかな真山の眉間になぜか皺が寄る。そしてつかつかと近付いて来て、奈津と配達員の間に自分の体を入れた。突然目の前に広がった真山の背中と、仄かに香るコロンの匂いに胸がどきんと高鳴った。

「おい、お前どこの運送会社だ」

「え、いや、ヤマ……ネコ運送、ですが」

これまでハキハキと話していた配達員が、どこか目を泳がせながらしどろもどろに答える。奈津は真山の背中に守られたまま、ただその会話を聞いているしかない。その間にも鋭い声色での真山の追及は続いていた。

「ヤマネコ運送なら帽子と作業着にロゴが入ってるはずだろ。この帽子も作業着も量販店で売ってるもんだよな。本物なら身分証出してしろ」

「……！」

途端に荷物を放り出した配達員が、方向転換して一目散に駆け出す。配達員が重いと言っていたはずの大きな段ボールが、簡単に宙を舞って転がった。

「結城！ 警察呼べ！」

そう怒鳴った真山が配達員を追いかけ、一瞬で引き倒してうしろ手に捻り上げた。「ぐあああつ！ 放せ！ 放せよ！ まだなにもしてねエだろうがよ！」

配達員だと思っていたオレンジ帽の男が口から泡を飛ばして叫ぶ。その声が深夜のマンションの廊下に響き渡る。

「おい！ 一一〇番！」

「は、はいっ！」

突然の捕り物劇に固まっていた奈津は、真山その言葉に弾かれたように飛び上がる。

そしてスマホを取りに慌てて室内に入った。

## 2

警察に通報してからは怒涛の展開だった。

騒ぎを聞きつけた同階の住人が見守る中、すぐに駆けつけた警官に男は引き渡された。この男、実は深夜に宅配業者やガス点検を装って一人暮らしの女性の自宅に入り込み、強姦、強盗を働く連続犯だったのだ。現場検証を終えた後、さらに詳しく事情聴取をとということになったが、深夜のため、日曜に改めるよう真山が話をつけてくれた。真山が奈津の上司だと名乗ったところ、警官も納得したのだ。

集まっていた住人達に騒ぎになったことを謝罪して回り、逆に労られてから自宅に戻ると、すでに時計は二時を回っていた。

「結城、大丈夫か」

疲れがどつと出てダイニングチェアに座り込むと、真山が心配そうに声を掛けてくれた。一人で自宅に入ろうとした奈津に、真山が心配だからと付き添ってくれたのだ。

必死に遠慮しながらも本気で断れなかったのは、真山と二人きりになれるチャンスを

逃したくなかったからだ。

「あ、はい。でもなんか、あんまり実感が無いっていうか……あ、あれ？」

今までなんともなかったのに、一旦落ち着くと今さらのように肩に震えが走る。カタカタと揺れる体を抱きしめると、隣に寄り添った真山がそっと肩をさすってくれた。

「今までずっと緊張状態だったからな。気が緩んで恐怖心が出てきたんだろう」

「すみません……。私、あんまり怖くないと思ってたんですけど」

安心させるように真山の手がゆっくりと動く。

その動きに身を任せているうちに次第に落ち着いてきたが、別の問題が出てきた。事件そのものよりも、現在の状況に対して心が穏やかではなくなってきたのだ。なにしろ憧れの課長に肩を抱かれているという、まさかのシチュエーション。

奈津の心臓の脈拍は速くなっていく。

「あ、そういえば」

「どうした？」

ふと思いだしたことがあって、奈津は声を上げた。

「何度か、下着がなくなることがあったんです」

真山の手がびたりと止まる。

「……それで？」

「もしかして、さっきの犯人がやったってこと、ないですよね？　ここ五階だし、盗まれたんじゃないで風で飛んだと思っただんですけど……」

下着がなくなるようになったのは、だいたい半年くらい前からだろうか。夜中に干していた下着がなくなることが何度かあった。

しかしこのあたりで下着泥棒どろぼうが発生しているという話も聞かないし、なにより五階まで上がってくる犯人がいるとも思えず、風か鳥の仕業しわざだろうと思ひ込んでいた。それがもしかしたら人間の、しかもさっきの男の犯行だったとしたら。その可能性に奈津は身震いする。

ところがそれに対する真山の返答は、奈津が思っていたものと少し違った。

「枚数は？」

「枚数、ですか？」

盗まれた枚数を聞いてどうしようと言うのだろう。首をかしげながら、今まででなくなつた下着を思い出す。

「え……と、正確には覚えてないですけど、多分十枚くらい、かな？　どうしよう、今から警察に言ったほうがいいでしょうか？」

「いや、十枚程度ならいい。そうだな、それに関しては後で話し合おう」

十枚ならいい？　少し引つ掛かりを覚えながらも、信頼する真山がそう言うなら大丈夫

夫だろうと奈津は引き下がった。

それよりも深夜の密室に二人きりで、しかもこんなに親密に触れ合っているなんて勘違いしそうで怖い。今までの二年間で交わした言葉の数を、今夜一晩で簡単に上回ってしまいたい。

これだけでも奈津はパンク寸前なのに、彼はさらに爆弾発言をした。

「よかつたら、うちに来るか。ここだと事件のことを思い出すかもしれないだろう」

「えっ!？」

真山の自宅、という言葉に過剰反応して、肩がびくと跳ねる。

行きたい。ものすごく行ってみたい。けれど言われるまま押しかけて、ただの部下のくせに凶々しいと思われたらどうしよう、と二の足を踏む自分もいる。

その様子を見た真山は、違う方向に勘違いしたようだった。

「あー、悪い。やっぱりあんなことがあった後じゃ、俺のことも気持ち悪いよな。悪かった、忘れてくれ」

「ちがつ……、そんなじゃないんですっ！　だって、課長にこれ以上ご迷惑をお掛けする訳には……」

目に見えて落ち込んで申し訳なさそうにする真山に、奈津は慌てて言い募もつた。

真山が気持ち悪いはずがない。奈津が危なかったところを助けてくれて、さらに心配

だからと付き添って<sup>い</sup>労<sup>た</sup>つてくれる王子様のような存在だ。

たとえこれまでの片想いがなかったとしても、今日みたいなことが起きればすぐに恋に落ちてしまっていたに違いない。

「はは。迷惑ならもう十分掛けられてるだろ。今さら気にするな。本当に俺が怖い訳じゃないんだな？」

「もちろんです！……でも……」

「よし、それなら決まりだ。今日はうちに来い。明日は美味しい朝飯作ってやるぞ」

そう言って笑う真山に、奈津は強引に椅子から立ち上がらされた。

確かに自宅にいれば、玄関を見るたびに嫌なことを思い出しそうだったのだ。またインターフォンが鳴るのではないかと、気になって眠れなかったかもしれない。

徒歩二秒の真山の自宅は角部屋で、奈津の所とは間取りが違って少し広かった。

モノトーンでシックにまとめられた彼らしい部屋の中、革張りの大きなソファに座らされると、真山が温かいココアを淹れてきてくれた。

「ほら、あったかいもん飲むと落ち着くぞ」

「ありがとうございます」

ココアの甘味<sup>あまみ</sup>が舌に乗り、喉を通って胃に落ちる。体の中から温まると、あれだけ高

ぶっていた神経が嘘のように鎮<sup>しず</sup>まった。

正直、犯罪被害に遭<sup>あ</sup>いかけて間一髪で助かった動揺もまだ少しだけある。その一方で自分がそれと気付く前に真山に助けられてしまったから、どこか実感が無い。しかも、憧れの人に甲斐<sup>かひ</sup>甲斐<sup>かひ</sup>しく世話をされているという現状のほうが奈津には一大事で、いつの間にか恐怖心は薄れつつあった。

ちなみにココアは奈津の好物だ。会社の休憩室<sup>きゅうけい</sup>でもよく飲んでる。まさか真山が知っているとは思わないが、この偶然が嬉しい。思わず頬<sup>ほ</sup>を緩ませると、それを見た真山が優しく笑った。

「やっと笑った。結城はココア好きだよな」

「ええっ!? なんでそれを……っ」

「は？ いつも飲んでるだろ。もしかして嫌いなのに飲んでんのか」

「い、いえ！ 大好きです……けどっ！」

ココアも。真山課長も。

大勢いる部下の中の、大して目立たない自分の好みにまで気付いてくれていたなんて。胸の高鳴りが止まらなくなってしまっただけではないか。

奈津がココアを飲むのをじっと眺<sup>なが</sup>めていた真山は、マグカップが空<sup>から</sup>になると隣に腰掛けた。近い。

体が触れ合う位置にびったりと座られ、奈津は緊張で体を硬くする。真山の重みでソファが沈み、うつかり体をしなだれかけてしまいそうになるのを、お腹に力を入れて精一杯阻止した。

だが、そんな奈津の健気な抵抗をあっさりかわし、真山の逞しい左腕が奈津の肩を抱き寄せる。

「え、課長……?」

「もう大丈夫か? 怖くなくなったか?」

「……あ、全然、怖くないです。ありがとうございました……」

駄目だ、勘違いしてはいけない。真山は奈津の恐怖心を和らげようとして近くにいるくれるだけ。さっきだって、奈津の自宅で何度も肩をさすってくれていたではないか。それと同じことをやっているだけだ。

「ならよかった。日曜は俺も警察に付き添うから一緒に行こう」

「……はい」

「本当に、結城が無事でよかった」

そう言いながら、真山の右手が奈津の髪まで撫で始める。大事なものを愛でるような、恋人を慈しむような、そんな態度にドキドキする。もう、ほとんど抱きしめられているも同然の体勢だ。

なんだか自分の周りだけ空気が薄くなったかのように呼吸が浅くなってしまふ。

「結城の髪は柔らかくて、触ってるだけで気持ちいいな」

「……あの、毎日流さないトリートメント使ってる」

「そっか、それでか」

なぜ今、髪の手入れの話などしているのだろう。もっと上手な返し方があっただろうに、酸欠味の頭ではまともな返答は浮かびそうもない。

そうしている間にも真山の左手は奈津の腕を伝って下り、腰の丸みを確認するようにやわやわと動く。

彼の鼻先が髪の毛に触れた。

「それにすごくいい匂いがする」

「……っ、コンビニに行く前にお風呂に入った、んです」

「このシャンプーいいよな。たまに会社で嗅いで、そのたびにムラムラしてた」

真山の手が太ももを撫でる。それと同時に頭頂部に柔らかない感触が降ってきた。

あ、今キスされた、と回らない頭で考える。

もう勘違いしてもいいだろうか。自分は女として真山に求められていると、そう勘違いしても。ただの上司なら部下にこんなことしないはずだ。

それから何度もちゅ、ちゅ、と唇が押し付けられた。髪に、額に、こめかみに、目尻に。

いつの間にか真山の左腕は奈津を拘束し、右手はニットワンピースに包まれた胸をそつと持ち上げていた。

「か、かちよお……」

胸を離れた右手が、くいと奈津の顎を持ち上げる。目の前には欲望に濡れた男の目をした真山がいて、奈津は覚悟を決めてそつと目を閉じた。

「んっ」

すぐに触れ合った唇は、燃えるように熱かった。奈津の唇の形を確かめるかのごとく啄んで、小さな水音を立てる。

奈津の全身から力が抜けたところを見計らって、真山はズルズルと滑らせるようにソファに押し倒す。わずかに開いた唇の隙間から、熱くぬめった舌が入り込む。

もう、なにも考えられなかった。

たった三時間前まではただの上司と部下だったのに、今はこうして柔らかな粘膜を触れ合わせている。ふわふわと海に浮かんでいるように気持ちがいい。真山が奈津のことをどう思っているのかなんて、今はどうでもよかった。

弱っている女が目の前にいたから試しに味見してやろうと思っただけかもしれない。部下が落ち込んでいるから、同情心から体で慰めてやろうと思っっているのかもしれない。一回やって、簡単に捨てられる可能性もある。

でも、もうそれでいい。今はただ、彼を一番近くで感じたい。

「んっ、ふあ……あ、んっ」

「結城……っ！」

二人で夢中になって唇を貪り合った。真山の大きな体に覆い隠されるようにソファに押し付けられ、何度も唾液を交換する。

奈津も真山の太い首に腕を回して、これが合意の上の行為であることを伝えた。奈津の剥き出しの太ももには先ほどから熱く硬い塊が押し付けられていて、あまり経験が多くない奈津は恥ずかしさのあまり脚を硬直させることしかできない。唇の端からはどちらのものともつかない唾液が零れ落ちる。真山がそれを舌で辿ってまた吸い上げた。

一体どれだけそうしているのだろう。

奈津の唇がぼつてりと腫れ上がる頃、真山はやつと唇を離した。それでも名残惜しそくに、唇を軽く触れ合わせたまま喋る。

「結城、……いいか？」

興奮のためか掠れたセクシーな声が奈津の脳みそを溶かす。キスだけでこんな風にされてしまうなんて、最後までしてしまっただろうなのだろう。薄く目を開いて首肯する。うつとりと微笑んだ真山の色気にくらくらした。

もしも奈津の人生の幸福度を表すグラフがあるとしたら、絶対今が一番のピークに決

まっている。

「なんなら日曜まで泊まっていけ。着替えも、下着くらいならあるから」  
しかしそんな浮ついた気持ちも、真山の一言で一氣に引き戻された。

——女性用の着替えが、あるんだ。

## 3

真山が引越してきてから半年。四六時中監視していた訳ではないが、なんとなく部屋に女性を呼んではいけないものだと思っていた。会社でも冗談めかして彼女募集中だと言っていたし、少なくとも隣に住んでいる奈津がそれらしい人と鉢合わせすることもなかった。

でも、彼女が、いたらしい。

思っていたよりもシヨックを受けている自分がかかりした。イケメンで、仕事が出て、出世頭で、優しく気が利いて、誰よりモテる。そんな彼に彼女がいまいほうがおかしいのに。

一夜限りの相手でもいいと思っていたが、彼女がいるなら話は別だ。浮気相手にはな

りたくない。彼女のために置いてある下着を着せるつもりだなんて、彼はなんて残酷なことをするんだらう。

奈津は表情を凍りつかせ、身を振って抵抗し始める。すると真山は目の色を変えて奈津の動きを封じ込めた。

「おい、今さら逃げるなんて許さねえぞ」

「……っ、やだ！ 嫌です、放して下さいっ！」

「なんでだよ！ さっきまで完全に堕ちてたじゃねーか！」

どこか傷付いたような、悲しみの響きを含んだ怒声。その大声に奈津はびくりと体を竦ませた。

「ひっ！ こ、怖い……や、やだやだ、本当に放してっ！」

涙をボロボロと零して暴れる奈津に、真山が怯んだように手を放す。

その隙をついて、なんとか真山の下から抜け出した。

「うっ、浮気相手は、嫌です！ 課長になら、遊んで捨てられてもいいって思ったけど……、彼女さんがいるなら、その人にも失礼だと思えますっ！」

涙のいっぱい溜まった目で言っても迫力などない。それでも言わないよりマシだ。言いたいことだけ叫んで、慌てて手櫛で髪を整える。すぐに自宅に逃げ帰るつもりだった。逃げ場所が隣だということのもなんとの間抜けな話だが仕方ない。

しかしソファから立ち上がるうとした奈津は、その直後うしろから抱きつかれてまたソファに逆戻りさせられた。

「きゃっ、やめて下さい！ 放して！」

それでも真山の腕は緩まない。

「やだ。……なあ、捨てないけどさ。俺になら遊ばれて捨てられてもいいって、本当？」

「もう違います！ 彼女さんがいるなら嫌だって言いました！ ……私……、私ずっと

課長のことが好きだったんです。でももう、今日で終わりにします」

そう言うと、奈津の双眸からまた水滴が溢れる。これまでの真山との数少ない思い出が走馬灯のように蘇った。

去年のバレンタインデーに義理チョコと偽った本命チョコを渡したら、『なんだ、本命かと思ったのにな』と大げさに残念がるフリをしてくれたこと。仕事がずれ込んで一人で社員食堂に行った時、同じく昼食が遅くなっていた課長と二人きりで食べたこと。

その日食べた白身魚のフライ定食の味は今でも覚えている。同じミスを繰り返して本気で叱責されたこともあったっけ。その時は風邪のひき始めで体調が悪くて、それに気付いた課長はすぐ病院に行くよう言ってくれた。そして、診察を受けたらインフルエンザだった。

「だから彼女ってなんのことだよ」

奈津の背中に胸板をびったりとくっつけた真山が、耳元で低音を響かせる。頭の中に直接声を注ぎ込まれるような感覚に奈津の背筋が粟立つ。

ともすれば真山にその場で服従してしまいそうになりながらも、力を振り絞って反論した。

「か、課長の彼女さんのことです！ 着替え置いてるんですよ？ 気まぐれで連れ込んだ部下にそんなの着せたら怒られますよ」

じたばたともかく奈津の力など、普段から鍛えている真山にはなんの抵抗にもならないのだろう。あっさりと腕の中に閉じ込められてしまった。

そういうえば真山は学生時代山岳部に入っていて、今でもたまに昔の仲間と山登りに行くと言っていた。実用的な筋肉を前にして、平均的な体力しかない奈津が敵うはずもない。そんな奈津を絶対逃がすものかとも言うように抱きとめながら、真山はうなだれたため息をついた。

「はあ……。彼女なんかいないっていつも言ってるだろ。会社で聞いてなかったのか」

「うそ！」

「ほんと。こんなシチュエーション三年ぶりだよ。だからほら、もうガチガチ」

もぞ、と背中に腰を押し付けられ、奈津は一瞬で赤面する。さっきまで奈津の太ももに押し付けられていた熱い塊がそこにある。



「お。耳まで赤くなつたぞ。結城は素直で可愛いな」

真山のまとう空気が途端に甘くなる。ねっとり奈津を包み込んで、もがいてももがいても逃げられないような空気。

「か、か、かわ……っ？ ひゃうっ!?」

不意に耳殻をべろりと舐められ、奈津は気の抜けた悲鳴を上げた。

「ふふ、なんだその鳴き声。見るたびに思うよ、結城のこと可愛いって。いつも一生懸命に仕事してるところも、休憩室でココアを飲んでニコニコ笑ってるところも、控えめで大人しいところも。……ずっと好きだったんだ」

ドクン、と心臓が跳ねた。あまりの衝撃に声が出ない。

もしかして今のは、奈津の脳みそが作り出した都合のいい幻聴だろうか。恋人募集中だと言っていた課長に彼女がいるとわかってショックを受けすぎ、一時的にオーバーヒートしているのかもしれない。

「う、うそです……」

「嘘じゃない。まあ、突然言われても困るよな。どうしたら信じてくれる？ そうだ、奈津に近付きたくて引越しまで言ったら信じてくれるか？」

「はいっ!?」

思わず振り返った奈津に、真山が冗談めかすように笑った。

でも目が笑っていない。予想もしていなかった、かなりハードな告白に、奈津はなんと返していいのかわからない。さりげなく下の名前で呼び捨てにされたことすら聞き流してしまつた。

「上司だからな、奈津の住所はすぐにわかつた。このマンションの空気が出るのをずっと待ってたんだ。まさか隣の部屋が空くとは思わなかつたが」

「……そう、だつたんですか？」

偶然真山と同じマンションに引越して来たと浮かれていたのに、これは真山本人によつて仕組まれていたらしい。少々、というか多大にストーカーチックな行動に引きながらも、彼への長い片想いが実ったことに気付き、じわじわと胸が熱くなる。

こんな素敵な人が自分なんかに恋をしていたなんて普通だつたら信じられない。しかし、好きだからと引越しまでして来た人間の言うことを信じない訳にはいかないではないか。

でも。

「……あれ？ じゃあなんで女性の着替えがあるんですか？」

奈津の疑問に、真山が眉をぴくりと動かした。やっぱり実は彼女が、と思いかけた奈津に、「絶対に、絶対に勝手に帰るなよ」と真山は言い置き、奥の部屋へと向かつた。すぐに戻つた真山の手には小さな衣装ケースがある。

無言で差し出され、奈津は躊躇ためらいつつも手を出した。

「見てもいいんですか？」

「ああ」

どこか開き直ったようなその態度に、なんだか嫌な胸騒ぎを覚える。

「じゃあ、失礼します。……………はあ!？」

中にしまつてあったのは、一枚ずつジッパー付きの透明なビニール袋で個包装された、風か鳥が攫さらつていったはずの自分の下着だったのだ。

## 4

広いリビングのフロアリングに座り、二人はビニール袋に入った下着を挟はさんで向かい合っていた。

ビニール袋には、一袋ずつ丁寧に日付と色、柄が書き込まれたシールが添付されている。そんなところに、普段と同じく入念で細かい仕事ぶりが見てとれてげんなりした。端はたから見ればシユールな光景だが、あくまでも真面目な、話し合いという名の取り調べである。「なんで盗ぬすったんですか！」

奈津が声を荒らげると、真山はふんと鼻を鳴らした。

「奈津が好きだからに決まつてるだろう。俺もまさか自分にこんな性癖せいへきがあつたなんて驚おどろいている」

「……………！」

もう開き直すことに決めたのだろう。あまりにも堂々とした態度に頭が痛くなつた。

「おー、また赤くなつた。やつぱり奈津は可愛いな」

「なっ！ 誤魔化ごまかさないで下さい！ こんなに集めてどうするつもりだったんですか？ ま、まさか、変なことに使つてるんじゃないや……」

「変なことつてなんだ。オナニーか？」

「真山課長！ ……きゃーっ！」

悲鳴を上げて真山の口を塞ふさぐと、思いつき嬉うれしそうに掌ちひらひらを舐なめられた。尻尾しっぽを踏ふまれた猫のように飛び上がって驚いた奈津は、手を押さえて逃げようとして、またあつさりあつさりと捕とらまつてしまう。学習能力がなさすぎる自分がかっかりである。

「奈津が言い出したんだらう。まあこれでオナつてると言いたいところだが、使うと汚よごれるしな。この下着に直接触れていた奈津のおっぱいを想像したり、ビニール袋の中に奈津の気配を感じて酒を呑んでいた」

「っ!!」

気持ち悪すぎるのだが。あからさまにドン引きした奈津にちゅっとキスを落としてから、真山は胡座を搔いて踏ん返り返った。

「じゃあ逆に聞くが、なんで駄目なんだ」

「え、な、なんでって、」

「理由を言ってみろ。いつも言ってるだろう、反論するなら相手が納得する材料を用意しろと。なんでだ」

おかしい。なぜこちらが詰問されなければいけないのだろうか。

夜のベランダに忍び込んで下着泥棒をするなど、奈津の常識では絶対にやってはいけない行動だ。というか、それ以前に犯罪ではないのか。

しかし仕事モードでそう言われると、だんだん自信がなくなってきて言葉に詰まる。そんな奈津を前にした真山が自信たっぷり腕を組んだ。

「理由はないんだな」

「ありますよ！あの、それって窃盗ですよね？……捕まります」  
とりあえず直球で事実をぶつけてみた。

「見つかからないようにする。奈津が通報しなければ発覚しないから問題ない」

そんなことでへこたれる人間なら、最初から部下の下着泥棒などしないのである。  
「通報は……まあ課長だってわかったからしませんけど。ベランダから入るなんて危

ないじゃないですか！」

「念のため命綱はつけている。だいたい山に登ればこれ以上の難所はいくらでもあるからな。別に危険でもなんでもない」

「下着泥棒のために命綱ですか!？」

嘩然とした。恐らく普段から愛用している登山道具を流用したのだろうが、そんなことに大事な道具を使って悲しくならないのだろうか。

いや、ならないから使ってるんだろうなこの人は、と自己解決する。

「まあそんなに言うなら、今度からは奈津を脱がせて直接盗ることにするが。そろそろ使用済みが欲しかったんだ。他には？」

「いやいやいや、今さらつと変なこと言いましたよね？それも盗らないで下さい。下着って意外と高いんですよ。上下セットで買っているから、片方だけなくなったら使いにくいし！」

ブラだけなくなってる着ける機会を失ったままのショーツを思い出す。

お気に入りだった淡い藤色の小花柄ショーツ。フルカップブラは胸全体を包み込む安定感があってヘビロテしていたのに、今はなんの因果か目の前でビニール袋に収められている。悲しい。

「だったら明日新品を買ってやる。二十セットくらいでいいか?」

「にじゅっ……！ そんなにいきりません！ とりあえず課長が盗んだのを返して下さい」  
 「それは俺のコレクションだから返せない。うちに泊まるなら貸してやる」  
 「課長っ！」

「なら、代わりに盗ったのと同じ数だけ新しいの買ってやるよ。これでどうだ」  
 「……………もう、それでお願います……………」

結局金で解決することになった。だいたい、「貸してやる」の意味がわからない。あくまでもこれらの下着の所有権は奈津にあるはずで、真山はただ盗んだだけの飯の所有者だ。それでも惚れた弱みというやつなのか、真山の口がうまいだけなのか、結局返してもらうことはできなかった。

交渉も説得も譲歩の引き出し方もうまいやり手営業課長の彼に、奈津が太刀打ちできない訳がない。こんなところに仕事で培った能力を発揮しないで欲しい。切にそう思った。「よし、下着の件はもういいな」

「全然よくな……………きゃっっ！」

今日何度目かの悲鳴を上げた奈津は、ひよいと抱え上げられた。いわゆるお姫様抱っこというやつだ。

「落ちると危ないから暴れるなよ？」

慌てて真山にしがみつくと、そのままずっと寝室まで運ばれて、中央に位置する

ダブルサイズのベッドに優しく下ろされた。また奈津が逃げ出すのを恐れるかのように、枕元のランプのスイッチを入れるや否や真山が覆いかぶさる。

薄暗かった寝室に、暖色系の優しい明かりが灯った。

ふと横目でランプを見た奈津は、それがあまりにもよく知っているデザインであることに驚く。レースの縁取りがされた笠と、温かみのある木目の台座。もしもこれが奈津の持っているランプと同じなら、スイッチの部分には雪の結晶のようなマークが入っているはずだ。

「あれ？ そのランプって……………」

奈津の視線を追った真山は、瞬時に奈津の言いたいことを悟って気まずそうに笑った。

「あー、あれな。俺も買ったんだ」

「だってそれ……………」

真山はデザインが気に入らなかったから譲ってくれたはず。ならば真山が追加で購入するなどありえないのではないか。

そう言って追及しようと思ったのに、無理やり顎を掴まれて、視線を正面に向き直らされた。真山の端整な顔が眼前にどアップで広がる。

「課長、まだ話終わってな……………」

「もう黙れ。また明日聞いてやるから」

「んんっ！」

真山の唇が奈津のそれを塞いだ。美味しそうに口内を蹂躪し尽くした舌が、奈津の首筋に移動する。

熱い吐息が肌を掠めて、唾液で濡れた皮膚がチリチリする。ほとんど無理やりのような行為に抵抗しなければと思うのに、体は言うことを聞いてくれない。目の前にいるのは、おあずけされた獣のようなギラギラした目で奈津を見ている男。

お腹の奥がずくと疼き、中途半端に火をつけられて燻っていた体が一気に燃え上がった。

「奈津……、奈津、好きだ。ずっとこうしたいと思ってた」

「……課長っ、ん、ああっ」

伸縮性のあるニットワンピースの胸元をぐいと引き下ろされる。ブラジャーも強引に下げられ、ぼろんと零れ出た乳房に真山が吸い付いた。

「ひあんっ！ ……あ、あッ、あ……！ やだ、襟が伸びちゃう……から」  
ちゃんと脱がせて。そう言うつもりだったのに。

「……ここで服の心配か。余裕だな」

熱心に乳首を求めていた真山が一瞬顔を上げ、焦れたような目で奈津を見上げる。

「きゃあっ!？」

直後に襲ってきた強い刺激に奈津は思わず声を上げた。こちらに集中しろとでも言うように、真山が熟れた尖りに噛み付いたのだ。

決して傷付けようとしてやった訳ではないとわかる、本気で痛みを覚えるギリギリ手前の強さ。甘噛みの後に強く吸われ、奈津の体が大きく震える。

「う、あ……、課長、私こういうの、あんまりしたことなくて……」

「こういうのって？ セックスのこと？」

「……っ、はい」

会話しながら胸を揉まれ、舌で乳首を転がされ、たまに思い出したように歯を立てられる。そのたびに奈津の腰が浮いて、体を、胸を、真山に押し付けるようになってしまふのが恥ずかしいのにやめられない。

奈津が今まで付き合ったことがあるのは、すぐに自然消滅してしまった高校生の時の彼が一人と、就職を機に別れてしまった大学生の時の彼が一人だ。就職してからは仕事を覚えるのに精一杯で新しい出会いを求める余裕がなく、やっと落ち着いた頃には真山に片想いを始めていた。

だから男性経験は大学生の頃の彼が最初で最後。しかも淡白な人だったから片手で数える程しかしたことがない。前戯は気持ちよくても挿入は苦痛を伴うばかりで、奈津はセックスにあまりいい思い出がなかった。

「そうか。それなら俺が一から教えてやるよ」

「……あの、だから……優しく、して下さい……」

最後のほうは、恥ずかしくてどんどん声が小さくなってしまった。

もしかしたら聞こえてないかもしれない、と思っただが、こんな至近距離で肌を触れ合わせていて聞こえないはずがない。喉の奥で唸った真山に、「無自覚に煽ったんだから自業自得だ」と、ふたたび嘔み付くようなキスをされた。

## 5

優しくして欲しいとお願いしたはずなのに、そこから猛然と襲い掛かってきた真山はまったく優しくなかった。欲望を隠しめせず、上質そうな薄手のセーターとストラックスを素早く脱ぎ捨て、奈津の洋服も一瞬のうちに剥ぎ取る。

慣れた手つきでブラジャーのホックも簡単に外され、ベッドの下に放り投げられた。

「やっ……」

真山の手がショーツにかかったところで、奈津はその手を押さえて身じろぎする。

ここまできてやっぱり止めた、などと言うつもりはない。しかし、やはり最後の砦で

ある薄い布を脱がされるのは恥ずかしくて、ついついその手に逆らってしまう。眉根を下げて小さく首を横に振ると、真山が意地悪く唇の端を上げた。

「じゃあ、このままでやるか」

「……えっ？」

「別に構わないぞ。むしろそのほうが俺としては好都合だしな」

宝物を見つけた少年のように、咄く真山に一体なにを問う暇もない。あっさりとショーツから離れた手が奈津の太ももを下から持ち上げる。

「ひゃああっ！ な、なんでっ、こんな格好……っ！」

ぐい、と開脚させられた奈津は必死に抵抗するが、脚の間に真山が陣取っているためまったく閉じることができない。それどころかさらに脚を広げられ、強い力で固定されてしまった。

「奈津を気持ちよくしてやるために決まってるだろ」

壮絶な色気を伴ってニヤリと笑った真山が、おもむろに頭を下げる。まさか、と思っただ瞬間には奈津の下肢に真山の口が寄せられていた。

「……………っ！」

初めての衝撃に声にならない悲鳴が漏れ、奈津は慌てて口を手で押さえる。

手始めに大きな舌でべろんと舐められたかと思うと、その直後、繊細な動きに変わった。

唾液をたっぷり絡ませた舌で下着越しに秘所をチロチロと刺激され、すぐにショーツはどろどろになってしまふ。

「んっ……あんっ、だめ……汚れちゃうからっ」

しかし奈津にはわかっていた。ショーツが濡れているのは彼のためだけではない。先ほどから体の奥がきゅんきゅんと脈打っていて、そのたびにこぶりと淫らな蜜が零れ落ちている。興奮のためにふっくらと膨らんだ小さな丘を食まると切なさど気持ちよさに襲われて、「ふあん……」とため息にも似た声漏れた。

「ん……、課長、わたし……」

「どうした？ 気持ちいいんだろ？」

「……はい、……あっ……」

少し前までじたばたと暴れていた奈津だが、すっかり抵抗する気力をなくしてしまった。下腹部からせり上がる快楽で、全身が水飴のようにどろりと溶けてしまったみたいだ。脚を開いて無防備な肉体を曝け出したまま、真山から与えられる刺激に素直な反応を返す。

たまにぴくんと脚を震わせる奈津を見て、真山は「とりあえず一回イッておこうな？」と優しくささやいた。

「えっ……イクって……、やああっ」

じゅん、と敏感な部分に強く吸い付かれ、奈津はその不意打ちに目を見開いて悲鳴を上げた。

今まで刺激されていた部分よりも少し上にある、怖いぐらいの快感を生み出す小さな肉の粒。薄い下着と一緒に口に含んで舐められると、べつとりと濡れた布の感触がダイレクトに伝わって腰が碎ける。分厚い舌で円を描くようにぐりぐりと押し潰され、体が溶けてなくなってしまうような錯覚さえした。

「ふああっ、そこっ……そこやだあっ！」

「イイの間違いだろ？ 奈津は意外と素直じゃないんだな」

気持ちいいのに、いや気持ちいいからこそ、自分がおかしくなってしまうと怖いのだ。イヤイヤと首を振ると、真山に似合うと褒められたダークブラウンの髪がパサパサと音を立ててシートに沈む。

しかし見え透いた嘘をついた奈津を戒めるかのように、真山はさらに花芯を攻める力を強める。奈津の羞恥を煽るためなのか、じゅるじゅると派手な音を立てながらショーツにむしゃぶりついている。

「ふあ、あっ、ア、……ああああっ！」

ぎゅつと握った枕に顔を擦り付けるようにして、奈津は体の中を駆け巡る強い快感をやり過ぎた。

きゆうつと体が丸まって、突き放したいはずの真山の頭を太ももで挟はさんでしまう。お腹の奥のほうで、なにかが小さな爆発を起こしたような感覚。目の前が真っ白く塗り替えられた気がした。

「んっ……な、に……?」

しばらく放心状態になっていた奈津がやっと我に返る。荒い息のままに途切れ途切れに言葉を発すると、真山が軽く目を瞠みはった。

「なんだ、今までイッたことなかったのか?」

「わか……ない……。こんなの、初めて、で」

戸惑う奈津の様子を満足げに見つめた真山は口元を拭ぬぐう。それから小柄な奈津に覆おほいかぶさるようにして耳元に口を近づける。

「気持ちよくなりすぎてバカになるってことだ。俺が奈津に本当に気持ちいいことを教えてやった、初めての男だな」

「う……、は、はい」

こめかみにちゅつとキスをされて、奈津は顔を熱くしながら小さく頷うなずいた。そんなこと、口に出して言わなくてもいいのに。

でも、「初めて」という言葉にきゅんとときめいたのも事実。今まで知らなかったことを彼にたくさん教えてもらって、彼の色に染まりつつある自分が少しくすぐったい。

隣にごろんと横になった真山が、奈津に腕枕をしてぐいっと引き寄せた。そして自由になったほうの手を使い、まだ絶頂の余韻よゐんが残る体をいやらしい手つきで撫なで回す。やわやわと胸を揉もみ、脇腹を撫なで、小さな臍へそのくぼみを伝っていく手に、奈津は思わず声を上げてしまった。

「なあ、奈津」

「……なんですか?」

隣にごろんと横になった真山が、奈津に腕枕をしてぐいっと引き寄せた。そして自由になったほうの手を使い、まだ絶頂の余韻よゐんが残る体をいやらしい手つきで撫なで回す。やわやわと胸を揉もみ、脇腹を撫なで、小さな臍へそのくぼみを伝っていく手に、奈津は思わず声を上げてしまった。

「……んっ」

一度落ち着いた官能を呼び覚まそうとするようなその動きに、お腹の奥くすぶで燻くすぶっていた種火たきがまた勢いを増す。

「ふあっ……あ、……んっ……」

「奈津、可愛い」

いつしか真山の手は、奈津が唯一まとっている小さな布地へと到達していた。ぐちゃぐちゃに濡ぬれそぼっているそこを繊細せんさいなタッチで揉もまれると、奈津は腰が砕けたみたい  
に力が抜ける。

だから、その隙すきに真山に片脚ひかたあしを拘束こうそくされて思いっきり開脚かいきゃくさせられたことにも気付く  
のが遅れてしまった。

「課長……っ、それ恥ずかし……っ!」



「恥ずかしいほうが気持ちよくなれるだろ？ ほら、濡れたパンツが張り付いて、穴の形まで全部見えてる」

「ここだろ？」と言いながら真山の長い指がショーツのある箇所を押し。過敏になってる部分に食い込んだ指の感触に、奈津は身を震わせて悶えた。

「……えっ、やだ、見ないで……っ」

「今さらそんなお願い聞かなくて思ってるのか？ ほら、奈津の小さい穴がさつきからヒクヒクしてる。こんなに小さくて、ちゃんと俺の物が入るのか心配だな」

「や……、ああっ」

奈津の耳元に顔を近付けた真山が吐息を漏らしてかすかに笑った気配がして、奈津はぶるりと体を震わせた。息を吹きかけるようにささやかれるたびに熱い吐息が首筋をくすぐり、悪寒にも似たゾクゾクとする感覚に翻弄される。

「ちゃんと入るように、ここをしつかりほぐしてやるからな」

クロッチをずらした真山の指が奈津のぬかるみにびたりと当てられた。

すでにとろとろになっていたそこは侵入者を誘うように蕩け、つぶんと埋め込まれた指を優しく包み込む。

「ん……っ！」

太い指が奥へ奥へと進む衝撃に声を上げそうになったが、その声が音となる前に真山

の唇に口を塞がれた。肉厚な舌がゆっくりと腔内を掻き回し、それと同時に二本の指が腔内を進む。声すらも満足に上げられず、片手は指を絡めて拘束されている。両方の口も塞がれてしまっていて、奈津は礫にでもされた気分だ。

「聞こえるか？ ぐちゅぐちゅ言ってる」

ふいに唇を離れた真山が奈津にささやいた。そして奈津に聞かせるためだけに指を動かすと、空気と混ざった愛液がぐぶぐぶといやらしい音を立てる。

「やっ、やだ、聞きたくな……」

「駄目だ。奈津が気持ちよくなっている音だろ？ こら、耳を塞ぐんじゃない」

奈津は自らの下肢が立てる卑猥な音を聞きたくなくて、自由になっているほうの手を耳に当てた。しかしすぐにその手も真山によって簡単にひとまとめにされてベッドへと押し付けられてしまう。

「悪さをする手はこうしておこうな」

「やんっ、……あっ、もう、いじわる……しないでっ」

奈津の目からぼとんと水滴が零れ落ちた。

別に悲しかった訳ではない。多分これは快感からくる生理的な涙。滲む視界の中で、激しく指を動かす真山が美味しそうに涙を舐めとっている。

彼がこんな意地悪だったなんて知らなかった。仕事に関しては厳しいけれど、それ

以外はいつも優しく物腰の柔らかい人だったのに。こうやって一番近いところに来てきた途端に牙を剥くなんてひどい。

「なんでだ、すごく優しいだろ？ 今だって、ほら」

「ふあああっ！」

奈津の中でなにかを探るように動いていた指がある一点を掠めた途端、そこから痺れるような感覚が伝わった。無意識のうちに腰が跳ねる。

「やつ、……あ、……な、なに？」

「ここが奈津のイイところなんだな。わかるか？ この腫れてるところを擦られると気持ちいいだろう？」

「あつ、やつ、そこ……！ あつ……ああつ……！」

自由にならない体をくねらせて奈津が悶える。くちゆくちゆと音を立てながら、優しい動きで刺激される。奈津が気付かない間に、いつの間にか指は三本に増えていた。

「やつ……こわい、またきちゃうのっ！ あつ……、あああんっ！」

入り口近くのお腹側にあるその場所を何度もこりこりと攻められ、さらに感じやすくなっている花芯まで親指で押し潰された奈津はすぐに高みに上り詰めた。真山の太い指を締め付けながら、またなにも考えられなくなる。その中でも執拗に指で刺激され、開きっぱなしになった口からは意味を成さない喘ぎ声だけが漏れ出てしまう。

## 立ち読みサンプル はここまで

やつと奈津の呼吸が落ち着いた頃、真山の指がずると体内から出ていく。その刺激にすら小さく声を上げて反応してしまい、自分の感じやすさに泣きたくなった。

「ほら、優しくしただろ。ちゃんと気持ちよくなったもんな？」

「う……、……は、い」

気持ちよかった、けど全然優しくなんかない。ずっと真山のペースで快樂漬けにされている。

しかし立て続けに絶頂に導かれた奈津には反論する気力などなく、ぼうっとしながら素直に頷く。その従順な返答を聞いて満足げに笑った真山は、力なく投げ出された奈津の脚からショーツを引き抜いた。散々いじり倒されたショーツは様々な水分を吸収してしっとり重い。

彼はそれを恍惚とした表情で眺め、あとで回収してコレクションに加えるために枕の下に押し込んだのだが、この時の奈津は知るよしもなかった。

それから真山は目の前で蜜を零し続ける花に、ふたたびむしゃぶりつく。

「あう！……ア、ああっ！ もうやだっ、むり……！」

「大丈夫、女は何回でもイケるから。ほら、もっかいイツとけ」

「やああんっ！」

真山の舌がぶつくりと腫れ上がった小さな花芽を捉える。真つ赤に充血したそれをク